

[書 評]

David Albertson

Mathematical Theologies:

Nicholas of Cusa and the Legacy of Thierry of Chartres

Oxford University Press; Oxford & New York, 2014, pp. 483

ISBN: 978-0-19-998973-7, 162 × 236mm, \$78.00

島 田 勝 巳

本書の著者 D. アルバートソン (David Albertson) は、現在南カリフォルニア大学宗教学部准教授で、2014 年からは米国クザーヌス学会長を務めている。本書は彼がシカゴ大学神学部に提出した博士論文を基にした全三部・十章から成る浩瀚な研究書である。米国クザーヌス学会前会長のカサレラ (Peter Casarella) は推薦の辞で、本書を「過去 10 年に著されたクザーヌスに関する研究書の中で最も洞察力に富み、また造詣の深い業績」と讃えているが、管見では、本書は「過去 10 年」というよりも、むしろこれまでに著された数多のクザーヌス研究書の中で最も重要な一冊になると言っても過言ではない。本書の登場によって、今日のクザーヌス研究は新たな地平の更新を経験しつつあるとさえ言えるだろう。

タイトルが語るように、本書の主題は西洋キリスト教史に伏在する新ピタゴラス主義の系譜、特にポエティウスの伝統を継承したシャルトルのティエリの思想を「数学的の神学」として捉えつつ、その文脈においてクザーヌスを読むことにある。そこで著者は、従来は断片的な指摘に留まっていたティエリとクザーヌスとの関係性について、これまで十分に光が当てられてこなかったシャルトル学派関係の資料群を丹念に読み解きながら、この稀代の神学者の思想全体を構築している錯綜した論脈を、驚くべき緻密さで辿り直している。

まず「キリスト教的新ピタゴラス主義の系譜学へ向けて」と題された序論では、アルバートソンが“*mathesis narrative*”と呼ぶ歴史記述が描出される。新カント派由来のこの「近代の起源」をめぐる語りにおいては、中世的世界像が、17 世紀のガリレオやデカルトらによる数学化・幾何学化された自然／世界像によって置き換えられたと言われる。だが著者によれば、この歴史記述ではデカルト以前の「普遍数学」*mathesis universalis* の歴史が看過されたため、新ピタゴラス主義の

伝統がいかにしてポエティウスの伝統において継承されたかが見失われてしまった。アルバートソンにとって、この伝統を12世紀と15世紀においてそれぞれ継承したのが、シャルトルのティエリとニコラウス・クザーヌスに他ならない。

第一部「新ピタゴラス主義の起源：概観」の第一章「初期ピタゴラス主義哲学のプラトン主義の変容」では、プラトン主義の広範な歴史の内部における数学化の契機としてのピタゴラス主義の歴史が、次のように概観される。つまり、1) 普遍的な数学的知としての前ソクラテス的ピタゴラス主義、2) 媒介的な数学的なるもの (mediating mathematical) を追求したプラトン、3) 超越的一性論 (transcendent henology) としての古アカデメイア派及び中期プラトン主義、4) 新たな方法において触発された新ピタゴラス主義の数の存在論 (number ontology) の四段階である。第一章ではこのうちの1) と2) が論じられる。著者によれば、ピロラオスやアルキタスら初期ピタゴラス主義では数学は哲学的・統合的な学知としてあったが、プラトンにおいては見える世界と見えない領域との媒介として、つまり数学が神的な善なるものを知るための必然的段階として捉えられることで、ピタゴラス主義に神学的な可能性を開くことになった (30-31)。だが、結果的にそこには、数学的絶対と神学的絶対との境界をめぐる困難な問いが持ち込まれることになる (39)。

第二章「新ピタゴラス主義の復活：一元論と媒介」では上記3) について論じられる。エウドロスとモデラトスによって代表される新ピタゴラス主義では、二元論的思考を超えた超越的一者の探求が中間的な神的原理の複数化に繋がり、一元論的思考と媒介の問題との密接な連関がさらに前景化した (41)。そこでは神的一性を省察するための機能が数の原理に与えられる。二世紀にはゲラサのニコマコスがこの一元論的思考を継承するが、著者はここに「数学的神学」の具体化をみる (51)。ニコマコスはアリストテレスの多 $\pi\lambda\acute{\eta}\theta\omicron\varsigma$ と大 $\mu\acute{\epsilon}\gamma\epsilon\theta\omicron\varsigma$ の概念を細分化し、算術・音楽・幾何学・天文学の四科を案出したが、これこそが最初の「普遍数学」の体系であり、それらを通して人は神性に参与し得るとされた (56)。また一者と多性 (数) との媒介の問題についてニコマコスは、フィロンの媒介としてのロゴス Logos と、新ピタゴラス主義的な神的数の媒介としてのアリティモス Arithmos を調和させた。こうして「数学的神学」とは、歴史的には1) 新ピタゴラス主義的一元論、2) ロゴスとアリティモスの媒介、3) 四科に根ざす普遍数学を前提とするといった特徴を有するとされる (57-58)。

さらに第三章「新ピタゴラス主義の古代末期的保存」では上記4) について、古代末期に新ピタゴラス主義と邂逅した三つの思想潮流が検討される。その一つのプロクロスの形而上学は、数学の位置づけを元来のプラトン主義的な立場に戻し、ロゴスとアリティモスの緊張を無効化させたことで、これを継承した偽ディオニシオスも媒介の問題から解放されることになる (68)。一方、アウグスティヌ

ス当初、新ピタゴラス主義に対しては両義的な態度を示していたが、プラトン主義に欠けていたロゴスの受肉の思索をめぐりアリトモスを拒絶したことで、次第に新ピタゴラス主義から離れていく(73-78)。これに対しポエティウスは、算術・和声学・幾何学・天文学に「四つの道」“quadru-vium”, つまり総合的・普遍的数学としての「四科」Quadriviumなる表現を与え、これによって神と世界の媒介としての数学というプラトン主義的テーマを再導入した、というのが著者の見方である(82)。

以上のような新ピタゴラス主義の歴史的展開を踏まえたうえで、「真珠採りの潜水夫：シャルトルのティエリの四科の神学」と題された第二部の第四章「ティエリの三位一体論神学の文脈」では、ポエティウスの伝統がティエリの三位一体論に与えた影響について論じられる。そこで著者は、ティエリがアウグスティヌスの三位一体論 *unitas, aequalitas, concordia* を精査するための道具立てとしてポエティウスの四科を招喚している点に注目する(111)。その際ティエリは、ポエティウスの著作に見られる四科と神学的議論との齟齬を統一的に読もうとするが、そこで鍵となるのは「相等性」*aequalitas* の理解である。ティエリにとって御言葉は、四科における数と量を通して知られるそれらの相等性において事物を規定するため、御言葉の神学と数学的神学は補強し合う関係にある(115)。こうしてティエリは、算術的媒介(四科)とキリスト教的媒介(三位一体)、あるいはアリトモスとロゴスの緊張を解き、ポエティウスの新ピタゴラス主義をアウグスティヌスの御言葉の神学に結び付けたとされる(117)。

第五章「褶襞の発見」では、「褶襞」*folding* によって構成される存在の四様相をめぐるティエリの議論が検討される。ティエリは「絶対的必然性」*necessitas absoluta*, 「結合の必然性」*necessitas complexionis*, 「限定的可能性」*possibilitas determinata*, 「絶対的可能性」*possibilitas absoluta* という存在の四様相を、「包含」*complicatio* と「展開」*explicatio* という褶襞の相互作用として説明する(128-129)。著者が重視するのは、ティエリが第二様相としての結合の必然性に託した媒介的機能である。それは数学と神学の連関を、包含たる「結合の必然性」が展開たる「絶対的必然性」に対する連関として説明することを可能にする。数学と神学は一義的な一性論を追求するものの、その唯一の違いは褶襞にあるとされる(132)。著者の見方では、これは数学的神学の新たな達成である一方で、同時に数学と神学をめぐる古代末期の緊張を再燃させることになった(138-139)。

こうしたティエリの新ピタゴラス主義的な数学的神学は、ラテン・キリスト教世界へのアリストテレスの翻訳の到来と初期スコラ学の興隆によってやがて忘却されていくが、第六章「衰退したティエリの遺産」ではその受容史が掘り起こされる。ここでアルバートソンが検討に付すのは、匿名の *De septem septenis*, クラレンバルト(Clarembald of Arras), そして1995年にドイツで発見された匿名

の草稿である。*Fundamentum naturae quod videtur physicos ignorasse*（以下『基礎』）と題されたこの草稿は、明らかにティエリの反駁を意図して13世紀転換期に書かれたとされる（144）。発見者である中世学者のフネン（Maarten J. F. M. Hoenen）はこの草稿に、クザーヌスの *De docta ignorantia*（1440、『知ある無知』）第二巻の7章から11章の文章と逐語的に類似する文章があることを見出し、その核心的な議論がこの草稿を「雛形」とするものであったと指摘した。アルバートソンはフネンのこの雛形説を評価する一方で、自らはティエリ思想を受容したこれらの三種の著作群に、より周到な比較分析を施している。それによれば、それらは異なった仕方でもティエリ思想を受容しながらも、共通してそこに御言葉の神学の可能性を察知している。そして、これらのいずれからでも少なからぬ影響を受けたのが他ならぬクザーヌスであった（162-165）。

第三部「輝かしき近接性：ニコラウス・クザーヌスの数学的神学」の第七章「『知ある無知』の偶然なる大成功」では、クザーヌスとその主著において、ティエリと他のシャルトル学派の諸著作、および『基礎』などの資料間の緊張関係をいかにして和解させようと試みているかが詳細に論じられる。そこからアルバートソンは、『知ある無知』第一巻と第二巻にあるパラレルな構造を見いだす。つまり、第一巻では算術的三位一体をめぐるシャルトル派の資料を紹介するために「最大なるもの」*maximum* 概念が検討され、第二巻ではティエリの存在の四様相を考察するために「縮限」*contractio* 概念が取り上げられる（178-179）。だが、これら両概念の由来は『基礎』の発見が説明してくれるが、第三巻のキリスト論については何も説明してくれない。ここでアルバートソンが目にするのは「相等性」*aequalitas* の概念である。彼によれば、クザーヌスは『知ある無知』第二巻第7章において、『基礎』から学んだ「縮限された宇宙」の観念を、ティエリから学んだ「相等性としての御言葉」という教説に接合している。そこでは相等性としての御言葉が、第二様相の媒介によって存在者を縮限する。『基礎』のように、第二様相を神の絶対性を脅かすプラトン主義の幻影として退けるのではなく、クザーヌスはむしろその媒介者としての価値について思考したとされる（188）。さらに『知ある無知』第三巻では、キリストは人としては縮限の最大者、神としては絶対的の最大者であり、キリストにおいてのみ二つの領域が統合されると言われる。そこでクザーヌスは、まずは絶対的の最大者を、縮限的宇宙には不在である「相等性」として規定し、次に縮限的の最大者の活動を展開 *complicatio* として規定する。アルバートソンによれば、ここでは単に受肉が絶対的の最大者と縮限的の最大者との合一として語られているのではなく、むしろそれは、神と世界を媒介するのが「存在の相等性」*aequalitas essendi* と「宇宙の縮限」*contractio universalis* の統合だという主張なのである（194）。

第八章「1440年代における仮採用のシャルトル学派神学」では、『知ある無知』

以降の 1440 年代のクザーヌスの思想展開が検討される。*De coniecturis* (1442-3, 『推測について』) では、数を宇宙体系に調和させる四つの一性が階層的に論じられる。かつて J. コッホはこの著作を、『知ある無知』における「存在形而上学」*Seinsmetaphysik* から逸脱した新プラトン主義的一元論に基づく「一性形而上学」*Einheitsmetaphysik* として捉えた。だがアルバートソンによれば、ティエリのみならず、彼の反駁を意図した『基礎』やその周辺のシャルトル学派の著作をもティエリ自身によるものと見なしていたクザーヌスは、この時期にはティエリの神学を「仮採用」しつつ、『推測について』においてシャルトル学派の資料を理解するための別の取り組みを行った (206)。『知ある無知』で示されたのはキリスト論の数学化であったが、『推測について』のテーマはキリスト論的統合には触れずにシャルトル学派の四科の神学を描出することにあった (202)。クザーヌスはそこで、御言葉が数学的媒介としての「結合の必然性」と衝突するのであれば、単に御言葉を放免し、ティエリの四様相を純粹に数学的な概念に組み直しつつ、数の自律的な媒介の作用を探求しようとする。つまり『推測について』では、受肉の御言葉ではなく第一の媒介としての数が、ロゴスの代わりにアリトモスが称えられるのである (210-211)。だが、この結果クザーヌスは、『知ある無知』における「受肉の御言葉による他律的媒介」と、『推測について』における「数による自律的媒介」という二つの神学的枠組みを抱えることになる (217)。

続く第九章「1450 年代における「幾何学的神学」の到来」では、まず 1450 年の *Idiota* (『無学者考』) 三部作の一つ、*De mente* (『精神について』) が取り上げられ、ここでクザーヌスはティエリの新たな読解によって、第二様相を御言葉と競合する半-神学的媒介者としてではなく、精神 *mens* の上昇に内在的な段階として捉えたとされる。つまり、「結合の必然性」は精神の本来の領域として捉えられ、精神は自らを三位一体の無媒介的類比 *similitudo incontracta* として見出される。クザーヌスにとってそれは数学と神学との親近性を改めて保証するもので、こうして彼は媒介をめぐる先の二つのパラダイム間の膠着状態から脱する道を示したとされる (242)。さらに『無学者』三部作の後、クザーヌスは幾何学に関する著作を続けて 6 冊著しているが、そのうちアルバートソンが目にするのが *De theologicis complementis* (1453, 『神学的補遺』) である。彼はこの書をクザーヌスの数学的神学の頂点と見なすが、その理由として、ここで神が卓越した幾何学者として描かれていること、及び幾何学的神学が視覚的であると同時に神秘的であらねばならないとされていることを挙げている (245)。神の自己-測定及び自己-視を御言葉としてのみならず数としても描くことで、『無学者』において緩和されたロゴスとアリトモスの関係性にさらなる調和をもたらそうとしたとされる (251)。

さらに第十章「1460 年代における円環の完結」では、クザーヌスの最晩年の

課題として、1440年の数学化されたキリスト論を1453年の幾何学的神学に結びつけることが挙げられる(256)。まず1460年の *Triologus de possest* (『可能現実存在』)では、絶対的な可能態及び現実態と両者の結合という三位一体的類比が形成されるが、この三幅対を凝縮したものが *posse-est* という造語に他ならないとされる(258)。また、そこでは幾何学的空間に運動が導入され、数学的諸概念が「朧げな像」*aenigmata* として特徴づけられる(260)。さらに *De ludo globi* (1463, 『球遊びについて』)においては、球遊びを例として、キリストが人間としては模範的なボール、神としてはボードの中心として描かれる。ここではキリストは、創造主と宇宙の中心が結合される当の空間とされる。そこには絶対的なものと縮限的なものを媒介するものはなく、キリストが空間的媒介に、つまり幾何学的秩序のネットワークを拡散させる偏在的中心となる(264)。アルバートソンによればこれは、受肉におけるあらゆる対立の克服が、四科によって可視化可能な宇宙の数学的秩序に基づいていることを意味する。こうして受肉が四科の神学的機能に関わることによって、ロゴスとアリトモスの調和が図られたとされるのである(276)。

以上のような考察からアルバートソンは、初期近代以降のキリスト教は、ロゴスを唯一の媒介として採用し、アリトモスをそのいかなる構成要件からも排除したと指摘する。本書で彼は、近代の *mathesis narrative* に対する反証例としてシャルトルのティエリとクザーヌスを新ピタゴラス主義的数学的神学の言説として読み、それによってキリスト教信仰と「普遍数学」とを不和にするものは少なくともキリスト教信仰の側には一実は何も無かったと語る。著者にとっては特に、数学化された宇宙の内部における受肉と三位一体をめぐるクザーヌスの思索は、*mathesis narrative* によって課された限界を回避し得るはずの数学的神学の企図に他ならなかったのである(279)。

以上のように、本書におけるアルバートソンの議論は、その問題設定の射程の広さのみならず、新ピタゴラス主義的な思想家、とりわけ近年発見された『基礎』を含む、ティエリ及びその周辺のシャルトル学派関係文献の読解の精密さという点においても瞠目すべきものであり、今後長きにわたりクザーヌス研究の一つの指標になり得るものに違いない。従来注目されてこなかった諸文献に照準し、クザーヌス自身がそれらをいかに継ぎ合わせていったかを、まるでパズルのピースを埋めていくかの如くに再構成していくアルバートソンの議論は、極めて説得力に富むものであり、見事というほかはない。

もちろん、本書にも問われるべき点はあるだろう。アルバートソンのクザーヌス解釈は、基本的にはクザーヌス自身が入手していたシャルトルのティエリおよびシャルトル学派のテキストの整合性を測りつつ、それらを自らの思想の中に統合していくプロセスとモチーフを基軸としている。したがってそこでは自ずと、

シャルトル学派以外の資料がクザーヌス思想に与えた影響については限定的な指摘に留まらざるを得なかった。

たとえば、アルバートソンによる『知ある無知』の「数学的神学」的読解は、従来のクザーヌス研究において優位だった（広義の）「否定神学」的読解に対する挑戦とも受け取れるものである。さらに本書の議論が、クザーヌスに対する偽ディオニシオスの影響を極めて限定的なもの、もしくはシャルトル学派の解釈を補足するための付随的なものとして捉えていた点は看過されるべきではない。だが、クザーヌス思想における偽ディオニシオスを介した「否定神学」的問題構成は、本書で展開されたようなシャルトル学派を介した「数学的神学」的問題構成と複雑に絡み合いつつも、なおクザーヌス自身の一貫した関心として捉えられるべきであるように思われる。